人文地理学研究 XIII 111～128 1989

還元主義的文化景観解釈法

中川　正

I　問題の所在
II　文化景観を形成する個人の行為
III　個人の価値と文化
IV　集団と文化
V　文化景観解釈の手順
VI　結び

I　問題の所在

筆者は過去5年間にわたって，合衆国ルイジアナ州における墓地景観の研究を行ってきたが[1]，その際にアングロサクソン系のプロテスタントが卓越する北ルイジアナと，フランス系カトリックが大多数を占める南ルイジアナを対比させることを主眼においてきた．当初それは，この両地域における対照的な文化が，いかに異なった景観を形成するかという課題の追究を意図したものであったが，研究過程において，この文化地理学の伝統的課題の前提に疑問が生じてきた．はたして，文化という実体が人間個人を超越して存在し，人間を動かして景観を生み出すのであろうか？景観形成要因としての文化の存在が証明できるのであろうか？

文化が景観を形成するというこのモデルを，学問的に確立した地理学者は，アメリカバークレー学派の祖である Sauer であろう．彼は1925年に発表した論文「景観の形態学」[2]において，文化地理学の目的を文化景観を形成するプロセスを解明することであるとしたうえで，文化を営力とし，自然地域を媒体として文化景観が形成されるという理論を提示した．Sauer にとって，文化は個々の人間を超越した実体であり，人々をその規範に従わせる存在であった．Sauer は，人文地理学は「人間組織や文化のみを対象とし，個人とは無関係の科学」[3]であるとした．この文化を実在化 (reify) して，それに要因としての地位を与える考え方は，その後の北アメリカの文化地理学研究にしばしば現れてきた．たとえば Sauer の弟子である Kniffen は，社会科学における文化地理学の位置づけを行う際に，文化地理的現象の要因を，動物としての人間，自然的地球，文化に分類し，その中で時間的・空間的に変化の最も激しい文化が，最大要因であるとした[4]．Kniffen にとっても，人間は文化によって支配される動物であり，個人の自由意志は，地理学の対象外とされていた．

Sauer が提唱して以来半世紀にわたって，大きな議論を呼び起こすこともなく受け入れられてきたこの文化概念は，1980年に Duncan[5] の強い批判を受けた．彼は，個人と遊離した文化の存在は，いかなる経験的データによっても証明され得ないうえに，血肉を持った個々の人間の行為の重要性を認める常識的判断に反するものであると論じた．この Duncan の論文の歴史的考察に関しては，いくつかの反論があったが[6]，要因としての文化の存在が認められるかどうかといった存在論的観点に対して，文化地理学者からの満足のいく反論はまだ行われていない．

文化景観を形成するのは人間を超越する文化であるか，それとも個人個人の人間の行為であるかという問題は，社会科学において全体論 (holism) をとるか還元主義 (reductionism) をとるかという根本的な議論に関連している[7]．全体論的な立場は，社会をその構成員と構成員間の相互作用以上のものとみなし，そこに社会全体を支配する精神，伝統，文化等の本質的実体が存在すると主張する．風土，地域性，地域複合体等の概念は，基本的にはこの立場に基づいている．一方，原子論 (atomism) や個体主義 (individualism) とも呼ばれる還元主義は，社会はその構成員と構成員間の相互作用の総和以上のものではないという立場をとっている．この立場は，現実は個体よりなり，個別的なもののみを真実とみなし，証明不能な概念による現象説明を排除する．自然科学は，原則的に還元主義的な立場をとり，多大な成果をおさめてきた．

人間を個人ではなく集団として扱ってきた地理学は，伝統的に全体論的な立場をとってきた．個人の行為をこと細かく検討したときに，マクロなスケールでの考察が非常に困難になってくるために，人間を超越した自律的文化の概念は，非常に好都合なものであった．そこに文化決定論的な，人間不在の文化地理学が，無批判に受け入れられてきた原因の一つがあると思われる．さらに，人間現象は自然現象とは異なり，複雑な社会現象を個人の行為に還元することは不可能であるとの根強い信仰も，全体論的立場がとられてきた大きな原因であろう．筆者は，もとより全対的論な立場を否定する意志はなく，かえって文化地理的現象の解釈には全体論的な視点が不可欠であるとの信念さえ持っているが，全体論的・実在論的概念の使用が，還元主義的な説明が及ばない次元に限られなければ，文化地理学の科学としての発展が望めないと考えている．

ここで問題となるのは，還元主義的な批判を行う地理学者も，文化地理学者が満足する代替案を十分に提示していないということである．文化景観学者の学問的問題意識は，農地，家屋，商業施設，工場，森林，フェンス，道路，宗教施設などといった具体的な景観要素から何が読み取れるかということである．Wagner and Mikesell[8] が，文化景観研究の目的として提唱した景観の体系的叙述，地域区分，地理的変容における人間の役割の理解，文化と文化コミュニティの理解が，現在の文化地理学者においても，大きな課題であることには変わりない．人間の主観的側面の定性的叙述を行う人文主義的方法も，集団間の相互作用に重点をおく社会地理学的方法も，文化地理学者の関心を必ずしも代弁しているとはいえない．本研究は以上の問題意識のもとに，個人の行為が文化景観を生み出すという還元主義的な前提に立つ文化景観解釈法を，演繹的に考案することを目的とする．そして，その還元主義的方法が，文化地理学の課題追究のためにいかに有効であるか，そして，その方法の限界は何かを考察することによって，全体論的な理論の必要性を再検討する．本稿では，理論構築のための具体的な文化景観の事例として，ルイジアナの墓地を利用する．

II　文化景観を形成する個人の行為

還元主義的な文化景観解釈理論は，景観形成の要因を，文化，社会，環境などの実在化した概念ではなく，実際に意志をもって行為を為す個人に帰す．その開拓的な試みは，Newton and Pulliam-DiNapoli[9] による合衆国南部の丸太小屋景観の解釈において見られる．彼らは人間は実際に家屋を形

成することができる実体であるとの認識から，丸太小屋の解釈モデルを，人間の行為のプロセスを演繹的に捉えることによって考案した．ここでは，彼らの理論を応用し，発展させることによって，さらに適用性の高い文化景観解釈モデルを構築する．

行為 (action) は，理性的存在によってなされる行動を意味する[10]．MacIntyre[11] は，人間の行動における行為を，物理的運動 (phyiscal movement) から区別した．同じ物理的運動が，その文脈によってまったく異なった行為を意味することがある．たとえば穴を掘るという物理的運動も，その行動が棺を埋葬するために行われる場合と，墓地に植林するために行われる場合では，異なった行為としてみなされる．穴を掘ること自体は行為ではなく，ある目的がその行動に加わった時に行為とみなされる．それゆえ，行為は常に人間の信念 (belief) と論理的に結び付いており，言葉が意味を表現するように行為は信念を表現する[12]．文化景観の諸要素も，人々がそれぞれ目的をもって形成した行為の結果であり，その個々には人間の信念が表現されていると考えられる．

人が文化景観要素を形成しようとするときに，彼は論理的な意志決定プロセスをたどる．そのプロセスは，アリストテレスによって，三段論法を応用した実践的推論にモデル化された．典型的な三段論法は，大前提と小前提から必然的な結論を導き出す．たとえば，すべての人間はいつか必ず死に（大前提），日本人が人間であるならば（小前提），必然的に日本人も必ず死ぬという結論が導き出される．実践的推論も，大前提，小前提，結論によって構成されるが，大前提が人間の価値・要求・信念であり，小前提がその大前提を可能にすると行為者が判断する諸条件，結論が行為であるという点で前者とは異なる．この理論では，人々が望み，その要求を満たす諸条件が整ったと判断した時，人々は行為をおこす．たとえば南ルイジアナの人が，自分の肉親の遺体を地上埋葬墓（地上に建設され，その収納庫に遺体を安置する墓）に埋葬したいとするならば(大前提)，彼がその要求を実現するための様々な条件が満たされたと判断した時に（小前提）地上埋葬墓を建設する（結論）．小前提として，彼は地上埋葬墓を建設するための資金を持たなければならないし，墓を建設する職人がいなければならない．また法律が地上埋葬墓建設を禁じてはならないし，その墓地を所有する団体の人々もそれを認めなければならない．ただ注目すべき点は，もし彼が地上埋葬墓を最初から望まなければ，同じ条件は小前提にはならないということである．様々な自然環境要素，法律，経済状況自体は，それのみで人の行為を生み出すものではなく，人の要求・価値・信念が行為を生み出す最大要因である．自然・経済・社会環境は決定論的に景観を形成するのではなく，人の要求を許す必要条件にすぎない．

還元主義的立場では，すべての文化景観解釈が，個人のこの意志決定プロセスに還元される．したがって，この個人の価値や信念自体は先験的な大前提とみなされ，その大前提の要因追究は，別次元の問題として排除される．ここに還元主義的立場の限界が見られるが，同時に，この方法を用いて行う文化景観解釈の目的を明確化することができる．すなわち，還元主義的方法の目的は，文化景観から人間の価値の要因を追究することではなく，人間の価値を発見することである．

しかし，はたしてすべての文化景観要素が，究極的に個人の大前提に還元できるのであろうか？常識的に考えても，文化景観は一人の行為の結果というよりは，多くは様々な集団による選択の結果であることがわかる．たとえば一つの墓地においても，ある墓石は一人の行為の結果であるかもしれ

ないが，別の墓石は遺族達によって据えられたかもしれない．墓地の設計，フェンス，植生は，コミュニティ全体の話合いによって決定されることもあろう．彼らは意見を戦わせながら，個人の大前提を妥協させながら，集団としての行為を生み出したのかもしれない．だれ一人として，他人とまったく同じ価値観を持つことはないので，文化景観形成プロセスすべての分析が必要なように思われるが，文化の概念を操作的に定義し直すことによって，このジレンマは解消される．次章では，新しい文化の定義が示され，その概念がいかに文化景観解釈に応用されるかを論ずる．

Ⅲ　個人の価値と文化

しばしば異なった集団間に，異なった価値パターンが観察される．ルイジアナを歩くと，カトリックがプロテスタントよりも，墓碑としてクロスをより頻繁に使用していることがわかる．またフランス系の人々は，アングロサクソン系の人々よりも，地上埋葬墓を好んでいる．ここでは，そのような集団間による景観の差異の単純な一事例を仮定して，その場合の意志決定のパターンを検討する．

まず最初に，ある地域に100人の構成員を有するグループＡとグループＢが存在し，彼らがそれぞれ墓地Ａと墓地Ｂを建設したと仮定しよう．もし一人が一つずつ，同時に墓石を購入するとするならば，200の実践的推論が行われる．ここでは，オベリスクが最も高価な墓石で，人々の要求実現を妨げる条件が経済的なものだけであると仮定する．グループＡのうちの80人と，グループＢの中で20人がオベリスクを最も欲する墓石であるとみなしたが，実際にはグループＡの40人とグループＢの15人が，オベリスクが高価すぎると判断したために，その要求を満たすことはできなかった（第１表）．換言すれば，彼らの小前提は大前提を満たすことができなかった．このグループＡとグループＢの差異は，統計的に有意である（$P \leqq 0.001$）．すなわち，グループＡのオベリスクを欲する要求傾向と実際に購入する行為傾向は，グループＢのものよりも強い．ここでは，２集団で統計的に有為な差異が見られる要求傾向を「文化要素」(culture traits)，行為傾向を「有形文化要素」(material culture traits) と定義することにする．

文化要素や有形文化要素は相対的な概念であり，従来の文化概念のように，必ずしも集団すべてに共通である必要はない[13]．グループＡのうち20人は，オベリスクを欲していないが，それでもオベリスクを欲する強い要求傾向はグループＡの文化要素である．グループＢの文化要素は，逆にオベリスクを欲する人が少ないというネガティブなものである．

第１表　文化要素と有形文化要素の仮説的事例

	グループＡ（Ｎ＝100）	グループＢ（Ｎ＝100）	χ^2
オベリスクを欲する要求・価値を持つ人	80	20	72.000（$P \leqq 0.001$）
	（文化要素）		
オベリスクを購入した人	40	5	35.125（$P \leqq 0.001$）
	（有形文化要素）		

また，文化要素自体は，世代を受け継いだり，伝統的であったりする必要もない[14]．ルイジアナにおいてオベリスクは，18世紀にはほとんど使用されておらず，19世紀末に増加し始めた流行であった．19世紀の人々は，18世紀の人々からその価値を受け継いだわけではなかった．現在流行しているメモリアルパーク用の墓石や，墓石に死者の生前の写真を付けるという要求も，集団間で有為な差異が見られるときに文化要素とみなされる．

一方，文化は多数の文化要素から帰納的に導き出される，ある集団の価値や要求の叙述的モデルとして捉えられる．ある2集団では，一貫して類似した要求傾向が見られる場合がある．たとえばルイジアナのカトリックは，プロテスタントに比べてセントラルクロス，クロス，像，小祠を好む傾向をより強く有する．各々の景観要素を欲する割合を2集団で比較した場合，景観要素によって統計的数値は異なるが，カトリックの価値的傾向を叙述する際に，カトリックはそれらのものをプロテスタントよりも好むと一般化することができる．ここでは，文化をその一般化したモデルとして捉え，要因として人間から超越して存在する実体として定義することはしない．本稿は，それゆえ文化を複合体やシステムとして捉えることをしないが，複合体やシステム等の実体としての存在の可能性を否定するものではない．ただ，その存在を証明し得ないものとして考察対象外とし，文化を説明要因としてではなく，集団の特性を表現する叙述モデルとして理解する．

なお本稿では，有形文化要素を文化要素から区別した．この定義によると，文化要素を有形物質への現れを通して推測することができる．理論的には一時的な行為も文化要素とみなすことが可能であるが，人々が購入したり建築したりする有形物質が，観察が容易で永続性のある行為の証拠であることは疑い得ない．有形物質そのものは有形文化要素ではないが，それが集団間の比較によって，有意な差があると観察されたときに有形文化要素になる．以前の例では（第1表），オベリクを購入する強い傾向がグループAの有形文化要素であり，弱い傾向がグループBの有形文化要素である．

文化要素を有形文化要素から導く方法は，実践的推論を応用することによって得ることができる．行為は大前提と小前提が満たされた結果であるため，大前提は行為と小前提から導き出すことが可能である．第1表において，グループAとグループBの行為の結果のみが明らかであると仮定すると，大前提を発見するためには，両グループの小前提を比較しなければならない．この例においては，すでに小前提は経済的条件のみであると仮定されている．したがって，もし両グループの経済的条件が類似していれば，彼らの文化要素は有形文化要素に対応しているとみなしてよいであろう．しかし，もしグループAがグループBよりも裕福であるならば，小条件の差異によって有形文化要素が生まれたことが考えられるために，文化要素の発見は困難になる．このように，集団による価値観の有為な差異（文化要素）を発見するために，文化景観の差異（有形文化要素）と諸条件（小前提）を検討することが必要である．

有形文化要素として現れている文化景観の集団間の差異は，このように文化要素と諸条件の結果であると解釈される．この場合の文化要素は，ある意味では文化景観の要因であるとも言えるが，従来の実体としての文化概念がになってきた説明要因としての地位は持たない．従来は，文化が人間を動かして景観を形成するという説明図式であった．しかし，ここで定義した文化要素は，人々の要求傾

向，すなわち価値パターンが行為傾向（文化景観パターン）に反映するという意味での説明要因である．換言すれば，この説明図式は「グループＡがグループＢより多くのオベリスクを有するものは，より多くのグループＡの人々がオベリスクを欲したからである」という同語反復的なものである．しかし，文化景観に現れた諸条件を，人々の価値パターンと区別することは，他の説明に先立って行わなければならず，そのことによって不確実な結論に飛躍することが避けられる．諸条件と文化要素をまず区別した上で，別のレベルの説明として，各々の条件と文化要素の要因の考察へと進むべきであろう．

Ⅳ 集団と文化

本稿の定義では，文化は集団間の比較によって導き出されるものであるため，集団 (group) 概念の明確化なしには，文化概念は理解され得ない．社会学者は，集団という概念を「特定の共同目標をかかげ，多少とも共属観をもち，相互作用を行っている複数の人々の社会的結合」[15] と定義しているが，還元主義的に文化景観の解釈を行う際に，このような定義の前提すべてを厳格に受け入れることは困難である．したがって操作的な概念であるカテゴリー（範疇）を定義した後に，本稿で用いる集団概念の再定義をすることにする．

カテゴリーは，一定の基準によって分類された人々を意味する．その指標は性別，人種，年齢，居住地，職業，血液型など，無数に存在する．どの人間も他人とは異なるため，いかなるカテゴリーも等質になることはない．カテゴリーは，実体である個人を複数にまとめる概念的枠組みであるが，カテゴリー自体は実体ではない．しかし，このカテゴリー間の文化景観には，意味ある差異が見られる場合と見られない場合がある．たとえば墓地におけるクロスの使用頻度は，ルイジアナのカトリックとプロテスタントの間には意味ある際だった差異が見られるが，血液型がＡ型とＢ型のカテゴリー間には意義ある差異が見られない．なぜならば，人々はクロスを使用するか否かによって，宗教的カテゴリーへのアイデンティティを表現することができるが，血液型に対してアイデンティティを示すことはほとんどないからである．本稿では，人々がアイデンティティを表現すると推定されるカテゴリーを集団 (group) と定義する．この例では，カトリック，プロテスタントは集団と考えられるが，Ａ型やＢ型の血液型は，おそらくは単なるカテゴリーにすぎない．

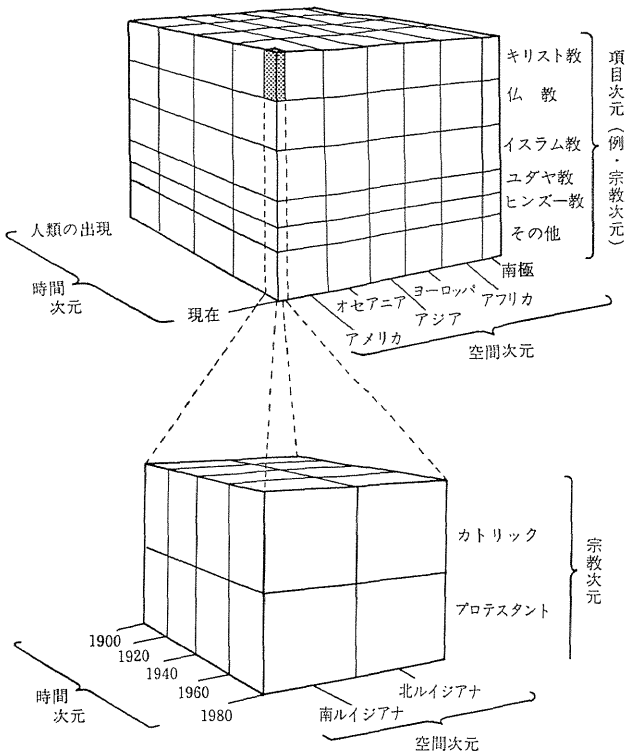
カテゴリーと集団の差異をさらに明確化するために，まず理論的にいかなるカテゴリーが可能であるかを検討し，次にそのカテゴリーの中で，何が集団とみなされるかを考察する．包括的なカテゴリーの図式として，ここでは空間次元，時間次元，項目次元からなる３次元座標を提示する（第１図）．現在と過去のすべての人類は，空間次元と時間次元のどこかに位置づけられる．人文地理学が対象とする空間次元の最大値は地表面全体であり．時間次元の最大範囲は，人類の発生から現在までである．

カテゴリーはこの最大の時空間次元を，任意のスケールで分割することによって作り出すことができる．地球的スケールでは，空間次元はアジア，ヨーロッパ，アフリカ，アメリカ，オセアニア，南極に分割することが可能である．スケールを変えると，分析目的に応じてアメリカをアングロアメリカとラテンアメリカに，または北，中央，南アメリカに分割することもできる．合衆国は北部，南

部，中西部，西部に，またルイジアナは北ルイジアナと南ルイジアナに分割できる．局地的スケールでは，人々を近隣地区単位に分類することも可能である．

時間次元も，任意の時代に区分することができる．合衆国では，時代は先史時代と歴史時代に分割され，歴史時代は植民地時代，連邦時代，南北戦争前の時代，南北戦争時代などに区分することができる．ミクロなスケールでは，10年単位，1年単位，1月単位，1日単位に分割することも可能である．

この時空間次元に，様々な項目次元をオプションとして加えることができる．項目軸は，年齢，人種，宗教，社会階級，所得，職業など，人間を区分するいかなる指標でもよく，またそれをいかなるスケールで分割してもかまわない．たとえば項目次元に宗教を選択したとするならば，それをキリスト教，仏教，ヒンズー教，ユダヤ教などに区分することができる．キリスト教は，ローマカトリック，ギリシャ正教，プロテスタントに，またプロテスタントはバプテスト，長老派，ルーテル，メソジスト，ペンテコステなどに細分される．地理学的研究においては，これらのいかなる項目的カテゴリーも，時空間の座標を考慮に入れて行わなければならない．



第1図　3次元的カテゴリー図式

これら無数のカテゴリーの中で，人々がアイデンティティを表現すると予想されるものは限られている．たとえば，ルイジアナの空間次元上に，人々は南北ルイジアナの地域的アイデンティティの差異を認めている．北ルイジアナの大多数の人々は，アングロサクソン系の農民の子孫であり，南ルイジアナの大多数は，フランス系の人々の子孫であるが，彼らは単に起源が異なるという以上に，独自の地域感情を有している．時間次元上には，人々は南北戦争前，南北戦争，復興時代，大恐慌時代などの時代を意識しており，墓地景観に彼らの家族，個人，地位の表現に関する価値観の変化を表現している．

項目次元に推定される集団も存在する．その中で最も墓地景観に関連が深い集団は，宗教集団であろう．ルイジアナでは，キリスト教徒とユダヤ教徒が同じ墓地を使用することは希である．同じキリスト教徒でも，カトリックとプロテスタントは，一般的に異なった墓地に埋葬される．また人種的集団も存在し，それはルイジアナ墓地において一般的なセグリゲーションによって認めることができ

る．カトリック墓地では，黒人セクションが，大多数の白人の墓とは別に設けられている．プロテスタントでは，黒人と白人が別々の墓地を持つことが多い．北ルイジアナの市営墓地の多くは，しばしば白人専用となっている．さらに，都市と農村のカテゴリーも，独自のアイデンティティの表現対象となるであろう．ルイジアナの都市の墓地では，整然とした区画が，直線的な通路によって作られている．家族の墓は，コンクリートの囲みによって他の民族のものから区分されている．墓標の多くは，それが設置された時の流行にそったものであり，墓の装飾は全国に一般的であるものが多い．これに対して農村墓地は，墓をその地方の流儀で配列し，家族の墓を囲む行為は例外的である．墓標としては，ローカルなものから全国的なものまで様々な形態が存在する．

人々が文化を論ずるときに，しばしば無意識に，様々な次元とスケールの集団を仮定している．たとえば，あるニューオリンズの墓地内の一つの地上埋葬墓を想定しよう．その花崗岩の墓には，クロスと死者の生前の写真が付けられている．空間的な次元をマクロスケールで検討すると，火葬を行わない特性は，この墓が西洋社会一般の特性を反映していることを示している．墓に刻まれている英語の墓碑は，英語圏に見られる特性を示している．ルイジアナ州内のスケールを考えると，地上埋葬は南ルイジアナに一般的である．これらのいわゆる文化的特性は，この地上埋葬墓の景観要素の頻度を，無意識にせよ西洋，英語圏，南ルイジアナといった地域的集団と関連させたために，明らかになった．

時間次元で検討すると，時代的な流行がその墓に反映していることが理解できる．ニューオリンズにおいて，人々が墓地に埋葬されるのは18世紀半ば以降のことで，それ以前には，人々は教会の建物の下や壁の中に遺体を埋葬することを理想としていた．またニューオリンズにおいて，墓碑をフランス語ではなく英語で作ることが一般的になったのは，19世紀後半になってからのことである．比較的ミクロなスケールで見ると，大理石よりも花崗岩の墓が流行するのは1940年以降であり，死者の生前の写真が流行するのは1960年以降である．このように人々は，しばしば時間的集団間の頻度の比較を行う．

項目次元を検討しても，様々な集団が発見される．宗教次元をマクロスケールで捉えると，火葬を行わない習慣は，仏教やヒンズー教に対して，キリスト教的なものといえよう．クロスの墓標もキリスト教のアイデンティティを示している．よりミクロに見ると，キリスト教でもカトリック教会へのアイデンティティが，クロスの使用に反映していると見ることも可能であろう．人種の次元で検討すると，死者の写真を好んで用いるのは，ルイジアナでは白人である．

このように一つの墓が，様々な次元の様々なスケールの集団の価値パターンを反映している．しかし観察者は，この文化的特性を，一つの墓の分析のみで発見することはできない．彼はたとえ無意識にでも，ある集団と他の集団の比較を行っている．個人の価値は様々な文化パターンを構成する要素であるが，文化の発見は，集団レベルのスケールでのみ行うことが可能である．文化要素の発見のためには，景観要素によって様々なスケールの集団を予想し，集団間の頻度の比較を行うことが必要である．この事例における英語の墓標は，合衆国内の都市，カウンティ，州レベルの比較では，特異なパターンを示す集団を発見できないかもしれないが，国際間の比較によって，英語圏の集団にみられる有形文化要素を発見することができる．また土葬の行為パターンは，現在の世界座標において，宗教集団間の比較によって発見することができる．またクロス使用に見られるパターンは，キリスト教

と他の宗教との比較，またはカトリックとプロテスタントの比較によって認定できる．

以上のように，文化が様々なスケールの集団の比較を前提としているとするならば，Lewis の「文化を発見する手がかりとして，人間の景観の一要素の果たす役割は，他の要素以上でも以下でもない」[16] という判断は不適切であろう．地理学者がどのスケールの集団に文化モデルを構築したいかによって，景観要素の重要性は異なってくる．もし彼が，18世紀と比較した現在のニューオリンズの文化要素を発見したいならば，教会の下や壁に埋葬することに対する墓地への埋葬という景観要素が重要な手がかりとなるが，土葬は手がかりとはならない．もし彼が，現在の北ルイジアナと比較した南ルイジアナの文化を叙述したいならば，地下埋葬墓に対する地上埋葬墓が有効な指標となるが，墓地への埋葬という要素は指標にはならない．文化の叙述を行うときに，景観要素の重要性は集団のスケールによって異なり，等しくなることはほとんどない．

文化を研究する学者達は，しばしば民俗文化 (folk culture) と大衆文化 (popular culture) という概念を，ある特定のスケールに対応する文化として用いてきた．しかし，この概念がいかなる次元のいかなるスケールの集団に対応するものであるか，明確な定義は行われてきていない．現代的なメモリアルパークの墓石や死者の写真など，大衆文化の要素と考えられている景観要素は，現在と過去の合衆国の比較，現在の合衆国の都市と農村の比較，現在の合衆国と発展途上国の比較によって，有形文化要素として認められる場合が多い．これに対して，墓地に芝生を生育させない慣行や，おもちゃを墓におくことなど，民俗文化とみなされている景観要素は，現在の北ルイジアナと南ルイジアナの比較，過去と現在の北ルイジアナとの比較，および現在の北ルイジアナの農村と都市を比較することによって，しばしば有形文化要素と認められる．

この民俗文化，大衆文化という概念は，叙述的用語として用いられる限りにおいては有効な概念であるが，それが本質を持つ実体であると実在化された時に混乱が生じる．この概念を実在化する人々は，それぞれの概念の本質を説明しようと努力する．民俗文化の本質は，伝統的，ローカル，農村的と叙述され，大衆文化は現在のもので，アメリカ的で，かつ都市的であるとされている[17]．それではこの2概念が包括しない伝統的な合衆国の都市文化や，現在の発展途上国の都市文化などは定義されなくてもよいのだろうか？もし彼らが文化は民俗文化と大衆文化によって構成されていると考えるならば，彼らは他のカテゴリーに属する文化が存在しないことを証明しなければならない．

それではこの民俗，大衆文化の概念を利用することなしに，いかに文化変容と呼ばれる現象を理解すればよいのだろうか？ここで南北ルイジアナにおける仮説的な事例を用いて考察してみよう（第2表）．ルイジアナの墓地すべてが，ある指標によって台地南部タイプ，フランス系ルイジアナタイプ，メモリアルパークタイプの3類型に分類されたと仮定する．1930年と1980年の両年に渡って，北ルイジアナの有形文化要素は台地南部タイプが卓越する傾向であり，南ルイジアナの有形文化要素はフランス系ルイジアナタイプをより多く用いる傾向である．しかしこの「民俗文化」要素の頻度は，いずれの地域においても，1980年に1930年よりも著しく減少し，その代わりに「大衆文化」要素であるメモリアルパークタイプが増加した．しかし，このメモリアルパークタイプが卓越するという有形文化要素は，南北ルイジアナいずれの集団に属する性質でもなく，北アメリカ集団に属するものである．

第2表　文化変容の仮説的事例

墓地タイプ	北ルイジアナ		南ルイジアナ	
	1930(%)	1980(%)	1930(%)	1980(%)
台地南部タイプ	90	60	15	10
フランス系ルイジアナタイプ	5	0	80	50
メモリアルパークタイプ	5	40	5	40

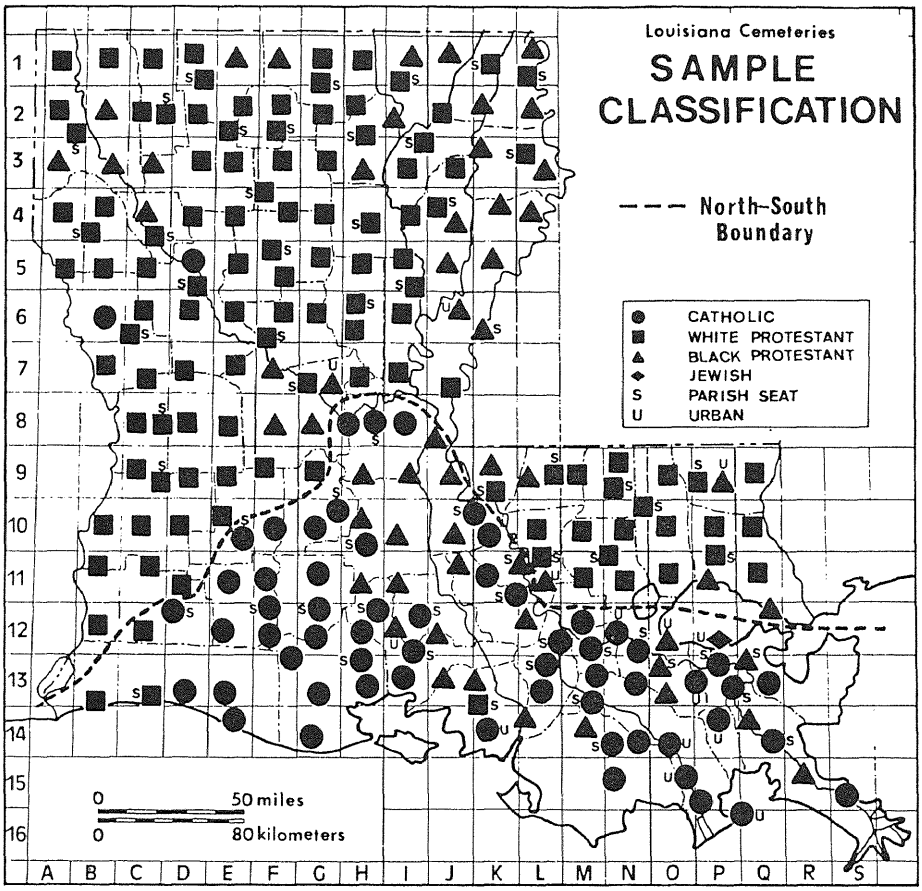
1930年から1980年にかけての景観変化は，ルイジアナの人々が，局地的な集団から国家的集団に，アイデンティティの表現対象を移動させてきたことを意味する．文化変容と呼ばれる現象は，この人々のアイデンティティの変化を示している場合が多い．

この集団の定義において，もう一つ解決すべき課題が存在する．あるカテゴリーが，人々のアイデンティティの表現対象であることが予想されても，そのカテゴリーの設定が，人々のアイデンティティを最も忠実に表現しているか否かに関する判断は困難である．たとえば，北ルイジアナと南ルイジアナは，人々がアイデンティティを表現する集団とみなされるが，南北ルイジアナの境界に関して，地理学者の間で厳密に一致した見解は存在しない[18]．しかし，ここで考慮しなければならないことは，アイデンティティの対象としての集団は，人々の頭の中に存在するものであり，実体として人間の外に存在するという証明はできないということである．各々の個人は，他人とは異なったアイデンティティを示す．ある人にとっての北ルイジアナが，他の人にとって南ルイジアナであることは，しばしば見られる．実体としての集団の存在が証明できない以上，地理学者のできることは，人々がいかに集団を知覚しているかを様々な指標を用いて発見することであり[19]，厳密に境界の定まった集団を発見することはできない．したがって，従来の研究成果や景観の観察によって，ある程度操作的に集団を定義することが正当化される．しかし後述するように，その操作的な集団間の比較から，さらに人々のアイデンティティパターンの実態に即した再定義も可能である．

V　文化景解釈の手順

本章では，以上の概念検討をもとに，還元主義的文化景観解釈の一例を提示する．その際に，筆者のルイジアナにおける墓地研究を具体的な事例として用いる．筆者は，ルイジアナを覆う62,500分の1の地形図から，その最も中心に近い墓地と，郡庁所在地の代表的墓地1つずつの計236墓地を抽出し，その各々における墓地景観を，実地調査によって記述した（第2図）．研究の時間次元は，調査を行った1984年12月から1985年5月現在のものとして設定され，空間次元の最大値は，ルイジアナ州である．

まず，文化を導出するためには，様々な集団を設定しなければならない．空間，時間，項目次元に様々な集団が仮定されるが，ここでは研究が困難な時間次元上の集団設定を便宜上省略し，(1)北ルイジアナと南ルイジアナ，(2)カトリックとプロテスタント，(3)白人と黒人，(4)都市と農村の4種類の集団を設定した．南北ルイジアナは，従来の研究に基づいて便宜的に設定された境界によって定義され，宗教，人種は，その墓地を構成するマジョリティによって決定された[20]．さらに都市，農村は



第2図　サンプル墓地の分類

その墓地が1,000人以上の人口を有する町に立地するかどうかで決定された．これらの基準によって，各々の墓地は，4種類の集団ラベルを持つことになった．

つぎに，墓地景観を要素に分解し，各々の要素の頻度を集団間で比較しなければならない．景観要素は，観察可能な物体や性質を意味し，眼で識別可能な墓石，装飾，植生，フェンス，門ばかりではなく，面積，墓の埋葬方向，墓の数など，測定可能な要素をも含む．本研究の事例の場合，ある墓地の景観要素を記述するときに，その要素を墓地単位に墓地特性 (traits) として抽象化することによって，集団間の比較が，より操作的になる．たとえば地下埋葬墓（墓地景観要素）が，「50%以上の墓が地下埋葬である．（墓地特性）として表現されたと仮定するならば，各々の墓地は「特性有り」，または「特性なし」のいずれかに分類される[21]．この「特性有り」の墓地割合を，各集団ごとに比較することによって，有形文化要素が導き出される．この時に，χ^2の検定などの統計的検定が，有形文化要素を定義する有効な方法となる．適切とみなされる有意水準（この事例の場合は0.001）が設定され，それによって2集団間に有為な差がみられないという帰無仮説が棄却されたときに，その景観要素から有形文化要素が発見される．「50%以上の墓が地下埋葬墓である」という特性の分布を集団ごとに比較すると，南北ルイジアナ間と，カトリック・プロテスタント間に，有形文化要素が発見され

第3表　地下埋葬墓の割合別墓地数

集　　団	地下埋葬率	
	50%未満	50%以上
北ルイジアナ	8	140
南ルイジアナ	71	17
	(χ^2=140.426	P≦0.001)
カトリック	50	11
プロテスタント	29	146
	(χ^2=86.867	P≦0.001)
白人	54	124
黒人	25	33
	(χ^2=3.202	P＞0.001)
都市	34	45
農村	42	115
	(χ^2=6.385	P＞0.001)

るが，黒人と白人間，都市・農村間には有為な差がみられない（第3表）．ここで，地下埋葬を可能にする諸条件（小前提）の検討が必要となる．ここでは，分布図や，他の資料とをもとに南北ルイジアナ間や，カトリック・プロテスタント間の自然・経済・法律条件などが検討され，その結果，それらの諸条件の差異を考慮に入れても，集団間の価値パターン（大前提）の差異を否定することができないという結果になった．その時に，南北ルイジアナとカトリック・プロテスタントの文化要素が発見されたとみなされる．もし，景観に現れた集団的なパターンがほとんど大前提に起因するものであると判断されたならば，集団景観比較によって導かれた統計数値によって，人々が地下埋葬を行うことによって，カトリック・プロテスタントの宗教的集団よりも，南北ルイジアナへの地域的集団に，より強いアイデンティティを表現したと推測することが可能であろう．このように，各景観要素の頻度を集団ごとに比較することによって，有形文化要素が導出され，その集団間の諸条件を比較することによって文化要素が導かれる．

この分析によって得られた結果は，集団の特性を表現する文化というモデルに統合される．筆者の研究事例では，51種類の景観要素が集団ごとに比較され，その結果，文化要素として認められた要素が，各集団ごとにまとめられた．ここでは事例の紹介を，北ルイジアナと南ルイジアナの文化の統合に限定するが，宗教的，都市・農村的集団にも，それぞれ独自の文化が構築されたことは，言及の価値があろう．ただしこの方法では，経済条件という小前提の差異が大きい白人・黒人間の文化導出はできなかった．

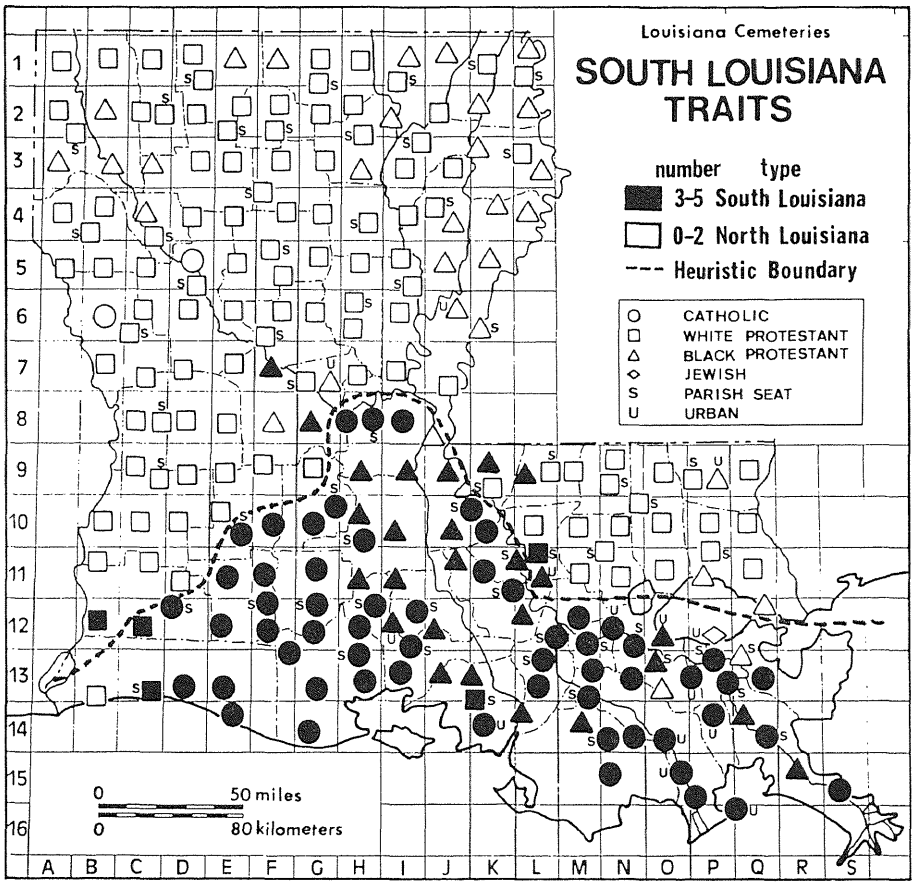
分析した51景観要素中30要素に，南北ルイジアナ間の有形文化要素が導出された（第4表）．それぞれの小前提を検討した結果，この30要素を要求する価値傾向には，有為な差異が存在すると判断され，それらの価値傾向は文化要素として認められた．この分析の結果，北ルイジアナと南ルイジアナの集団の価値パターンが，叙述的に文化として表現される．北ルイジアナ文化は，人々を地下に，足を東に向けて埋葬させることを適当とする．地下埋葬墓は，頭や足に置く墓石によって，また家族をまとめるコンクリートの枠取りによって，その存在位置を示さなければならい．死者に敬意をはらうためには，墓石に当時流行の模様を刻印することが望まれる．これに対して，南ルイジアナ文化は，人々を地上埋葬墓をコンクリート棺などの地上に埋葬するとこを特権とし，死者に敬意を示す方法としている．この地上に現れた墓は，それ自体で墓石の役割を果たしているために，人々はそれ以外に墓石を置く必要性を感じない．このような解釈は，叙述的に行われることが許され，ここに現象学的な解釈が応用される余地が存在する．ここで論じられている文化は，分析結果を統合した結果

第4表　南北ルイジアナにおける特性別墓地割合

墓　地　特　性	特性を有する墓地の割合（%）		χ^2
	北ルイジアナ	南ルイジアナ	
地下埋葬50%以上	94	19	140.4
クロス10%以上	4	76	134.2
コンクリート棺埋葬20%以上	8	75	108.6
足を東に向ける埋葬方位	93	31	102.8
足と頭に置く墓石10%以上	69	2	101.2
地上埋葬墓10%以上	1	50	83.2
立体式コンクリート棺埋葬	1	48	80.7
セントラルクロス	0	45	77.0
十字架像の墓石	3	46	65.6
墓石としての像１%以上	9	56	62.6
小祠	0	36	62.2
立体式墓地 (mausoleum)	0	37	60.6
握手の墓石モチーフ	55	15	35.6
３種類以上の墓石モチーフ	50	13	32.5
鳩の墓石モチーフ	61	25	29.4
小羊の墓石モチーフ	68	34	27.1
コンクリート	51	84	25.5
フリーメーソン墓石	45	13	24.7
樹木	86	57	24.5
天を指さす墓石モチーフ	35	7	22.5
教会の所有	37	69	21.8
人種の混合	6	28	20.4
パルピット墓石	64	35	19.5
コンクリート区画内の砂	18	0	18.1
オベリスク墓石	60	32	17.1
草を生育させない地面	16	0	16.6
複合式墓50%以上	10	30	15.9
自然石の墓石	14	0	13.7
コンクリート区画内の大理石片	27	7	12.5
コンクリート区画	56	34	11.3

構築されたものであり，先験的な決定要因として存在するものとはみなされない．すなわち，文化は地域や集団の特性記述を行ううえで有効な叙述的概念とみなされる．

最後に，有効な墓地景観特性を指標として，その集団間の分布の残差から，操作的に定義された集団を，より適切に人々のアイデンティティを表現するものに再定義することが可能である．この事例の場合，当初南北ルイジアナの境界は，従来の研究を参考に操作的に設定されたが，分析結果をもとに，この定義を改良することが可能である．様々な統計的操作がその方法として可能であるが，ここでは一例として，有形文化要素が発見された景観要素を単純に組合せて地図上に表現する方法を用いる．まず，南北ルイジアナを区別する指標として，χ^2 の値が100以上を示す５つの景観要素を抽出する．そして，南ルイジアナの特徴を示す指標として，(1)地下埋葬墓が50%未満，(2)クロスが10%以上，(3)コンクリート棺埋葬が20%以上，(4)足を東に向ける埋葬パターンがみられない，(5)足と頭に据



第3図　南ルイジアナ的墓地特性の分布

える墓石が10%以上が選択され，各々の墓地において，5つの要素中，幾つが該当するかを地図上に落とした（第3図）．このうち，3つ以上南北ルイジアナ特性を持つ墓を南ルイジアナタイプ，2つ以下のものを北ルイジアナタイプとすると，操作的に定義された集団が，実際の人々のアイデンティティを，比較的忠実に表現していることが理解される．しかし，境界線に近いいくつかの北ルイジアナ墓地（たとえば地図上番号8G，11Lなど）は，南ルイジアナと再定義され，いくつかの南ルイジアナ墓地（12P，8Jなど）は，北ルイジアナと再定義されることが検討されなければならない．このように，地域集団の再定義や，地域区分を行う際に，この還元主義的方法は有効である．

VI　結　　び

本稿で展開した還元主義的解釈は，従来の全体論的説明とは，存在論的な前提において異なり，その差異が方法論的な相違をもたらした．従来の，全体論的なルイジアナ文化景観研究は，文化を複合体として捉え，ルイジアナの文化景観が，主に北ルイジアナアングロサクソン系プロテスタント文化と，南ルイジアナフランス系カトリック文化によって形成されると説明していた．したがって，それぞれの地域で全体的なパターンからはずれた景観は，文化的影響に反した個人の自由意志や，社会的

・自然的要因が働いたと解釈されていた.

一方，還元主義的解釈は，すべての文化景観が個人の自由意志の結果であるとみなす．しかし，個人は，自分の自由意志によって，文化景観を通じて様々な集団へのアイデンティティを表現するために，操作的に定義された集団間の比較を行うと，その集団間に有為な差異が見られる場合があると解釈する．したがって，個人がアイデンティティを示す対象は，実在論的に人間の外に存在するものではなく，個人の頭の中に存在するものであるとみなされる．操作的に定義された集団概念は，集団の設定を空間次元上にばかりではなく，時間次元や様々な項目次元上に設定することを可能にした．ルイジアナでは，南北ルイジアナ集団とカトリック・プロテスタント集団は，質的に異なったアイデンティティの対象として，別々に分析された．その結果，従来の研究では明らかにならなかった，両アイデンティティの具体的差異が示された．さらに人種間，都市・農村間の集団の設定も行われ，それぞれに文化要素が発見された．この柔軟な集団設定は，様々なアイデンティティの現れである文化景観解釈を，より現実に即したものにするうえで有効である．説明要因ではなく，叙述モデルとして利用される文化概念も，集団や地域の特性記述という文化地理学の目的にかなった概念として有効であろう．

しかし，本稿の方法には，いくつかの解決すべき課題が存在する．本稿では，個人と集団を結ぶものとして，アイデンティティという概念を用いたが，はたしてマクロスケールでのパターンすべてが，アイデンティティの現れとして捉えられるかどうかは，さらに検討の余地がある．さらに本稿では，個人個人が意志決定を行った場合を集団レベルで考察することによって，演繹的モデルを導出したが，2人以上の話合いによって行われる行為に関する検討は行われなかった．この点に関して，Newton and Pulliam-DiNapoli が用いた，省略三段論法というモデル[22]の応用が検討されなければならない．

本稿で紹介した還元主義的方法論において，全体論的な概念や理論がどのように位置づけられるのであろうか？まず，本研究の方法は，個人の価値や信念を先験的に与えられたものとみなし，その価値や信念の要因追究を，景観解釈の目的としなかったところに，その限界があることを理解しなければならない．なぜ個人がそのような価値を持つにいたったかに関する説明は，還元主義的方法では不可能であり，ここに全体論的方法が応用される余地があろう．還元主義的方法は，人々の価値パターンの発見には有効であるが，説明には不適当である．

さらに，すべてを個人の行為に還元することができるとした本稿の方法論の前提を，全体論的な観点から批判し，再検討することによって，よりよい方法論が構築されなければならない．常識は，確かに個人の意志の重要性を認めるが，はたして全ての行為が，人間の自由意志の結果と言い切ることができるのだろうか？たとえば，母国語は，自分の意志によって習得したものではなく，乳児の時から当人の意志に関なく与えられたものであり，人は多少なりとも言語の影響を受けるのではないという疑問は，十分に検討の余地があろう．この疑問に答えるために，社会学で用いられている構造化(structuration) 理論[23]の検討も進められるべきであろう．

本稿の還元主義的方法は，従来の無批判な文化概念による景観説明に疑問を投げかけたものであ

り，従来の全体論的方法の代替案として提示された．その結果，地域や集団の特性記述，および地域区分において，その有効性が示唆されたが，文化や個人の価値の発生要因の説明には，全体論的理論の必要性が提示された．今後，この方法論をより操作的に改良し，建設的に検討していくことによって，文化地理学者達が持ち続けてきた，具体的事実への関心を重視した，より強力な理論が確立されるものと考えられる．

注・参考文献

1) Nakagawa, T. (1987): *The Cemetery as a Cultural Manifestation—Louisiona Necrogeography—*. Unpublished Ph. D. Dissertation, Louisiana State University.

中川　正（1988）：ルイジアナ州アセンション郡における墓地形態—死の地理学序説—．人文地理学研究，**12**, 113－137.

2) Sauer, C. O. (1925): The morphology of landscape. *University of California Publications in Geography*, **2** (2), 19-54.

3) Sauer, C. O. (1925)：前掲 2)，p. 7.

4) Kniffen, F. B. (1954): Wither cultural geography? *Annals*, Association of American Geographers, **44**, p. 222.

5) Duncan, J. S. (1980): The superorganic in American cultural geography. *Annals*, Association of American Geographers, **70**, 181-198.

6) Norton, W. (1984): The meaning of culture in culutural geography—an appraisal—. *Journal of Geography*, **83**, 145-148.

Kenzer, M. S. (1985): Miliew and the "intellectual landscape"—Carl O. Sauer's undergraduate heritage—. *Annals*, Association of American Goegraphers, **75**, 258-270.

Solot, M. (1986): Carl Sauer and cultural evolution. *Annals*, Association of American Geographers, **76**, 508-520.

7) Simmons, I. G. and Gox, N. J. (1985): Holistic and reductionistic approaches to geograpcy. *In* Johnston, R. J. ed., The Future of Geography. Methuen, London, 43-58.

8) Wagner, P. L. and Mikesell, M. W. (1962): The themes of cultural geography. *In* Wagner, P. L. and Mikesell, M. W. eds., Readings in Cultural Geography. University of Chicago Press, Chicago, p. 10.

9) Newton, M. B. and Pulliam-DiNapoli, L. (1977): Log houses as public occasions—a historical theory—. *Annals*, Association of American Geographers, **67**, 360-383.

10) Lacey, R. (1976): *A Dictionary of Philosophy*. Routhledge and Kegan Paul, London, p. 1.

11) MacIntyre, A. (1962): A mistake about causality in social science. *In* Laslett, P. and Runciman, W. G. eds., Philosophy, Politics, and Society (Second Series). Barners and Noble, New York, 48-70.

12) MacIntyre, A. (1962)：前掲11), p. 51.

13) 文化を集団構成員が共通に持つものであるとした定義の例として，

Kluckhohn, C. and Kelly, W. H. (1945): The concept of culture. *In* Linton, R. ed., The Science of Man in the World Crisis. Columbia University Press, New York, p. 98.

14) 文化を世代間を受け継いだ，伝統的なものとみなした定義には，

Mead, M. (1937): *Cooperation and Competition among Primitive People*. McGraw-Hill, New York, p. 17.

Sapir, E. (1921): *Language*. Harcourt Brace, NewYork, p. 221.

15) 見田宗介，栗原杉，田中義久（1988）：『社会学事典』弘文堂，東京，P. 439.

16) Lewis, P. (1976): Axioms for reading the landscape—some guide to the American scence—. *In* Mining, D. W. ed., Interpretation of Ordinary Landscapes—Geographical Essays—. Oxford University Press, New York, p. 18.

17) Redfield, R. (1947): The folk society. *American Journal of Sociology*, **52**, 293-308.

Foster, G. M. (1953): What is folk culture? *American Anthropologist*, **55**, 159-173.

Glassie, H. (1969) : *Pattern in the Material Folk Culture of the Eastern United States.* University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

Carlson, A. (1975): Cultural geography and popular culture. *Journal of Popular Culture*, **9**, 482–483.

Nye, R. B. (1983) : Notes on a rationale for popular culture. *In* Geist, C. D. and Nachbar, J. eds., The Popular Culture Reader. Bowling Green State University Press, Bowling Green, Ohio, 21–25.

18) Newton, M. B. (1975) : Blurring the north-south contrast. *In* Del Sesto, S. L. and Gibson, J. L. eds., Culture of Acadiana: Tradition and Change in South Louisiana. University of Southwestern Louisiana, Lafayette, 42–48.

19) この観点にたつ代表的研究として,

Zelinsky, W. (1980) : North America's vernacular regions. *Annals*, Association of American Geographers, **70**, 1–16.

Shortridge, J. (1987) : Changing usage of four American regional labels. *Annals*, Association of American Geographers, **77**, 325–336.

20) サンプル墓地の中に，ユダヤ人墓地がひとつ存在するが，本研究ではカトリック・プロテスタントの比較に焦点を絞ったために，便宜的に景観が比較的類似しているプロテスタント墓地に分類した.

21) 墓地特性は，有形文化要素導出のために，最も効果的な指標をもって分類されるべきであるが，その具体的な導き方に関しては，今後の課題となろう．しかし，ここで例にあげたように，単に経験的に有効とみられる指標をいくつか設定して，その中で最も集団間の差を際だたせるものを選択するという方法でも，かなり有効な結果が得られる.

22) Newton and Pulliam-DiNapoli (1977) : 前掲 9), pp. 363–365.

23) 社会学における構造化理論の代表的な著書として,

Giddens, A. (1984): *The Constitution of Society—Outline of Structuration—*. University of California Press: Berkeley.

地理学者による構造化理論の応用には,

Gregory, D. (1981) : Human agency and human geography. *Transactions*, Institute of British Geogaraphers (New Series), **6**, 1–18.

Kellermn, A. (1987) : Structuration theory and attempts at integration in human geography. *Professional Geographer*, **39**, 267–274.

A Reductionistic Approach to Cultural Landscape Interpretation

Tadashi NAKAGAWA

Cultural geographers have traditionally attempted to explain cultural landscape through the reified concept of culture. Culture has been regarded as an autonomous entity above individual human beings that causes man to act. The holistic concept of culture, however, is impossible to link the empirical data in such a way as to demonstrate its existence. Science cannot be based upon the preconception that such cultural influences exit. This study proposes a reductionistic alternative to cultural landscape interpretation which avoids the application of reified concepts.

Based upon the assumption that, ultimately, only individual men can play a causative role in the creation of cultural landscapes, a theory is constructed by examining man's action modeled on the practical syllogism. A man creates an element of cultural landscape (conclusion) when he desires (major premise) and the conditions allow him to fulfill his desire (minor

premise). A significantly different people's desire and belief tendency of a group from that of another is defined as a culture element, while a significant action tendency is defined as a material culture element. Culture elements (major premise) are identified by examining material culture elements (conclusion) and environmental, economic and social elements (minor premise). Culture is defined as a descriptive model for the generalization of a group's belief pattern.

This reductionistic method first divides the complex landscape into elements. The frequency of each element of one group is compared with that of another to identify a culture element. Then several culture elements of one group are synthesized into a culture. Geographical method of areal association is added for further interpretation.

The application of this theory to cultural geography leads to an effective regional classification, systematic description, explanation of distribution, understanding of the group characteristics, and recognition of man's active role in geographic transformation.